土木学会誌，93 (12), pp. 57, 2008.

土木の「意味」を考える。

藤井　聡

筆者の専門はいわゆる計画系である．先日その関係のとある場面で，どうしても「土木計画とは何か」を定義しなければならない，というところがあった．これまで曖昧に計画系，計画系，と自身の専門を述べてきたのだが，それが一体何なのかを定義するとなると，これがなかなか難しい．なぜなら，土木計画とは何かを定義するにはそもそも土木とは何かを定義しなければならないからである．

はて，土木とは何だろう．土木工学とは civil engineering なり，との言はしばしば耳にするし口にもする．だからこそ土木工学なるもの市民のための工学だ，社会を文明化するための基礎工学だ，と大学で講義したりもしてきた．しかし，日本語を説明するのに英語を用いるというのは何とも口惜しい．しかも，電気工学の電気も機械工学の機械も何かをイメージするのは容易いのに「土木」という二文字だけは何ともイメージしづらい．

あれこれ思いを巡らすと，やはり一番ピンときたのが「築土構木（ちくどこうぼく）」という四字熟語に土木の起源有り，との説であった．この説とは，次のようなものである．

中国の古典哲学書「淮南子（えなんじ）」（紀元前 2〜1 世紀頃）の一節に次のような下りがある.「昔、民は湿地に住み、穴ぐらに暮らしていたから、冬は霜雪、雨露に耐えられず、夏は暑さや蚊・アブに耐えられなかった．そこで、聖人（宗教家ではなく，知徳が高き人物の意）が出て、民のために土を盛り材木を組んで室屋を作り、棟木を高くし軒を低くして雨風をしのぎ、寒暑を避け得た．かくして人びととは安心して暮らせるようになった」この傍点部分の原文が「築土構木」という言葉であり、この言葉に土木という言葉が由来しているというのである。

筆者はこの説に巡り会った時に土木という言葉に関わる“もやもや”が全て晴れた気がした．

第一に，土木という言葉が電気や機械のようにわかりにくいのも当たり前なのである．電気や機械は対象とするモノや物理現象の名前である．しかし，土木とは土地を盛り、木を組むという「行為」の名称である．モノや物理現象は目で見れば赤子でもそれが何だか分かる．しかし「行為」の名称であるならイメージしづらいのも致し方なきところだろう．

第二に，土木に関わる議論が「公に資する」という技術者としての倫理に関する議論と不可分であることも必然である．なぜなら，上記の「築土構木」という行為を為したのは，一般の民が自分のために行う普通の行為なのではなく，知徳高き「聖人」が民のために為した行為だからである．古市にせよ廣井にせよ青山にせよ，土木の偉大な先達が皆，公に資する志高き人物であったのは，土木が土木であることの必然だったのである．

言葉を蔑ろにする者にまともな奴はいない——，よく聞かされた言葉であるが，土木という言葉にしてもそうだと思う．浮き世の空気などはさておき，聖人たり得ぬ我が身を恥じつつ，土木という言葉を大切にしていきたいと思う．